

## 第23回 I地区仮設住宅訪問 平成24年2月14日

訪問者:松下、森、生活支援アドバイザー2名(記録:LLPまち・コミ友田)



I地区集会所にはすでに10名の参加者とそのうちの一人の孫であるよちよち歩きの赤ちゃん一人が待っていた。今回は福島県いわき市での造形ボランティアで行う「簡単織物」と「毛糸のぼんぼん人形」の指導練習と予告していた。しかしながらあることを思い付き、森と松下は織物も人形もすでに熟知している参加者に別の提案をした。見本に制作した毛糸のぼんぼん人形を応用した鳥のあやつり人形を見せながら「今日は皆さんにいわきでボランティアをしていただくに当たり、指導だけでなく、このような鳥の人形を作って、人形ダンスを披露してもらうように練習してもらいます」と松下が言うと、参加者はいつもながらそれはまた急に面白いことを言い出したなという表情になった。なによりも速く、鳥のあやつり人形が動くのを見て飛びつい

てきたのはKちゃんだった。大喜びのKちゃん的笑顔がいわきの被災者に直結したかのように、すぐに活動の意図を飲み込んでくれた。

さっそく制作に取りかかった。今までとは雰囲気が違う。参加者の間を材料がどんどん動いて配られていく。見本を見て、同じ寸法に糸を切る人、何本必要か計算する人、待ちの姿勢が全くないのだ。手際よさ、頭の回転が加速されたようだ。短い時間の中で完成させようとする意志が感じられる。もともと手仕事に慣れた人達である。6体の人形ができあがった。「それでは、これからあやつり鳥のダンスの稽古をしてください」と松下が言うと、いわきボランティアに行く予定の女性達が円陣になった。歌はなにがいいか、どんなふうに人形を動かすかを相談している。円陣の中心でゆらゆら動く鳥たちに囲まれて興奮したKちゃんがばたばたしているという状況だ。この時点で人前に並び立つというイメージは思い浮かんでいないようであった。「お客さんはこっちにいてください」と松下が言うと、初めてそこにお客さんが現れたようだ。松下、他の参加者、支援員、Kちゃんを膝にだっこした森がお客さんになって、拍手を送る。それを合図に右手から5人の女性が鳥人形と共に歩いて登場した。「うまい、うまい」と客席から声が飛ぶ。おとなしく踊る鳥、上に下に活発に動く鳥、ひとりひとりの個性のままの鳥達である。5人はおじぎをして頭を上げ、こちらを見た。その時、皆は円陣で内側に

向かい合っていたものから、観客を前にして並び立つものになった。いわきボランティアの連絡事項を伝え、片付けを終える頃にはあやつり人形劇団のチーム名が決まっていた。ふるさとの地名も入り、そして若々しい「AI シスターズ」が誕生した。

## 第24回 福島県いわき市仮設住宅訪問 平成24年2月23日

訪問者:松下、森、生活支援アドバイザー2名、社会福祉協議会職員1名、卒業生1名、I地区より7名、千葉テレビ3名(記録:LLP まち・コミ友田)



2月23日は朝から雨であった。I地区仮設住宅住民7名がボランティアとして福島県いわき市のT仮設住宅を訪問した。

ボランティアの7名のうち5名の女性陣は社会福祉協議会職員のTさんの運転する車で松下とともに、2名の男性陣は千葉県生活支援員の車で支援員2名とともに、朝8時にI地区仮設住宅を出発した。いわき市役所近くのそば屋で12時に昼食。城西国際大学卒業生でいわき市内の高齢者施設に就職したTさんも参加してくれた。

森らは早くに市内に到着したため、小名浜漁港など、沿岸に行ってみることにした。森は昨年の10月に日本一の防潮堤が破壊された岩手県田老町の被災状況を見た。ここ福島でも広い範囲が家の土台枠のみを残して、跡形もなく流されていた。被災後1年が経とうとするが、新築の家はほとんどない。家の跡に花が供えられているのが悼ましい。瓦礫の山も未だに片付いていない。北の岩手県宮古、南の千葉県旭、そしてその中間地点の小名浜周辺の被害を見て、東日本沿岸は例外なく、津波から免れることができなかったのだという思いが初めて実感として迫ってきた。日本列島の形の胸から腹にかけて深い傷を負った。そしてちょうど心臓のあたりに福島第一原発がある。今もなお癒えることなく出血し続ける日本列島を自分の身体が痛むように感じた。

現地の仮設住宅集会所に到着すると、同行のテレビ局の取材班がI地区参加者の下車する様子から撮影をしている。テレビ局の同行は4日前に決定した。これを参加者は拒むことはなかった。かえって励みにしているようである。

開始時間ぎりぎりに到着したため、集会所にはすでにたくさんの人が集まっていた。「簡単織物」か「毛糸のぽんぽん人形」のどちらかを選んでもらい、織物13名、人形7名が分かれて席に座った。

材料を配布する際に違和感を感じたことがある。「まだ、もらってないんですけど」「こっちにないんだけど」という声がかかる。目の前に材料がなければ当然のことではあるのだが、こちらの不備が指摘されるような何かが含まれているように感じてしまった。「この織物は段ボールを長くすると襟巻きも作れます」と森が説明すると、「襟巻きはもういいよ」と声があがる。事前に造形の企画案を提出したときにも「指編み襟巻き」は断られた。よほど、たくさんの襟巻きの指導を受けてきたのだろうか。

指導する側、される側の構図が変わったのは、こちら側のボランティアが被災者であるということが本当に伝わった頃だ。最初の挨拶でI地区の被災者であることは紹介していたが、隣りに座り、作業のやり方を説明する会話の中で実感されていったようだ。「毛糸全部ながされちゃったよ」というつぶやきに「うちも全壊なんですよ」と応える。「ええ？どこ？」「I地区、千葉県」「ああ、そうなの」という会話になる。福島と千葉の訛りが混ざり合う。

I地区の女性陣は素晴らしい指導力を発揮した。人形が出来上がってくると、「わあ かわいい。これにリボンをつけましょうか」と言って、リボンの作り方の指導をし、森たちが思いもつかない展開になっている。編み物が得意な人と見ると、さらに上級のかぎ針編みの小さいモチーフを指導している。対応力と応用力がある。完成した作品への賞賛にも力が入る。

造形活動の後は、操り人形ダンスの発表である。ホワイトボードに「AIシスターズ」の旗を貼り、整列した。演目は「はるよこい」「上を向いて歩こう」「365歩のマーチ」「北国の春」で、その4曲を会場全員で合唱してもらい、それに合わせて鳥達が踊る。男性2名は「プラスボーイズ」となって間の手を入れる。踊りの途中にいわきの被災者も飛び入りで踊りの輪に入る。いわきの被災者が場を盛り上げようとしてくれるのが伝わった。

最後にシスターズとボーイズが前に並び立つ。Yさんが代表で挨拶をする。「同じ被災者同士、いつでも駆けつけます。」というYさんの穏やかだが、芯の強いしっかりとした言葉に大きな拍



手が起こった。ボーイズの一人91歳のKさんは最後に一言と松下に促されてお辞儀をした。にこにこしていたKさんの顔が泣き顔になった。



森はI地区の被災者である7人がこの計画を遂行したことで変わったと感じた。同じく被災した人々の言葉を傾聴する側になっていた。同じ被災、同じ辛い状況を体験したからこそわかるという立場で、別の被災者を受け止めていた。人間の器はどこまで深いのだろう。自分自身の辛さを受け入れ、なお、他者の辛さを受け入れる。他者に求められる、待たれることで、その器は深くなるのであろうか。

いわきの参加者は口々に鳥の人形の作り方を知りたいと言った。これを作って次なる活動の意欲を示すことで、I地区ボランティアの思いに応えた。

I地区の7名は被災以来の働きかけられる側から、今回、他者の前に他者に働きかけようと立った。互いは隣りにいるという気配で繋がっている。見えなかったものが見えたという確かな光を7人の目の中に感じた。